

# 英 語 科

天野 紳一・松村 健・山崎 学肖

## 【中学校卒業時のめざす生徒像】

初歩的な英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができる生徒

＝外国の文化や他者と英語でのコミュニケーションを積極的に行う態度がある

英語に関する知識・技能が深まっており、4技能（話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと）を駆使して、状況や相手に応じて適切に英語を使うことができる

## 【研究の経緯】

昨年度の実践研究から、小学校においてフォニックスを取り入れた文字に関する指導を行うことで、英語の読み書きについて興味関心を持つ児童が多くなった。また辞書を授業内で活用することにより、より児童が英語を楽しみながら学習することができていた。小学校の英語活動においては、英語表現（英会話）を繰り返し行い慣れ親しませることに焦点が当てられているが、そればかりでは児童が学習に対する意欲が低下したり、児童の知的好奇心を満たすことができなかつたりすることが課題としてあげられる。そのような従来の英語活動の課題を解決するために、小学校高学年段階でフォニックス指導を行うことにより、ことばの体系的知識を学ぶ素地を養うことができる。

また中学校1年生では、小学校で行った指導を踏まえてフォニックス学習を行った。フォニックス指導の中でも、基礎的な練習を続ける群と発展的な練習を取り入れた群とに分けて検証を行った結果、基礎的な練習を続けた群の方が、フォニックスに関する知識において有意な差が見られた。この結果を参考にして、小学校でどの程度のフォニックス学習が可能であるかを再度検討していく。

小学校と中学校の指導の最大の相違点「文字を書くこと」と「文法指導」である。その中でも特に「文法指導」に焦点を当てて取り組んだ内容を示す。ことばの体系的知識を学ぶためには、ある程度ことばに慣れておかなければならない。そして、小学校で取り組んだ表現を中学校で整理していく必要がある。昨年度の文法指導に関する実践研究においては、英語のインプットと教師からの発問により英語の使い方（機能）について学習することが可能であるかを検討した。結果は、生徒はインプットからその表現が使われる状況や内容に気づくことができ、多くの説明を必要とすることなしに、言語事項を学習したり、自己表現で活用したりすることができていた。しかしながら、言語事項に関する例外や細かな内容については、生徒自身が気づくことができなかつたので、教師からのフィードバックが必要であることが分かった。

小学校と中学校での英語学習において共通している点は、「コミュニケーション」と「ことばに関する気づき」である。小学校からことばに関する体系的知識に関する気づきを多くもたせる指導を行うことで、中学校の文法指導につながると考える。中学校では英語インプットからどのような表現が使われているのかを自ら気づかせる指導を行うことで、ことばに関する体系的知識の獲得と活用をめざす。

## 【授業仮説】

Ⅱ期前期（小学校5年生～6年生） <ことばの体系的知識に気づく時期>

Ⅱ期前期では音声面を中心とした表現（会話）練習を継続して行いながら、母語と外国語の比較、具体的には発音の違い、状況に応じた表現の違いなどの「ことばへの気づき」を促す指導を行う。音声面では例外のないアルファベット3文字程度のフォニックス指導を中心とし、ことばの体系的知識に気づかせる指導を入れていく必要があると考えている。文法のようなことばの体系的知識の学習は中学校に

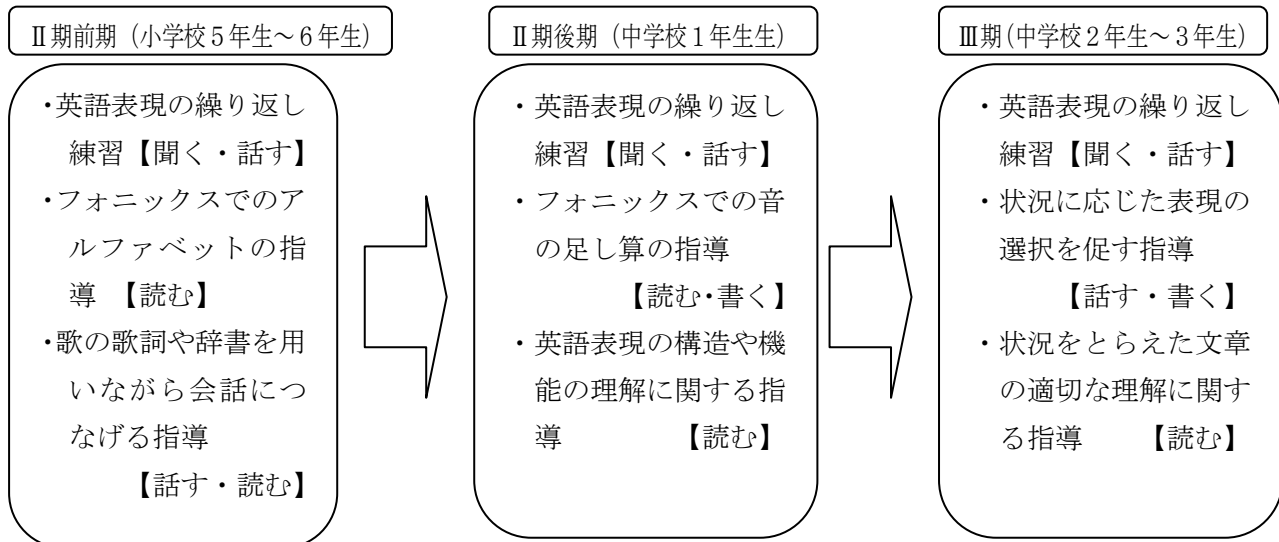
入ってからとなるが、小学校ではフォニックス指導において体系的知識を学習する活動、英語の歌の歌詞を読み解く活動や辞書を引いて自分で単語を見つけ会話に使用する活動を少しずつ取り入れていく。このような指導を行うことにより、経験・体験と理解をつないだり、言語知識を使って語句を読んだりする学習をさせることができるのではないかと考える。

**Ⅱ期後期（中学校1年生）** <ことばの体系的知識を理解する時期>

Ⅱ期後期においてことばの体系的知識を理解するとは、小学校で気づいたことばに関する知識を自分で見つけたり説明したり、また状況に応じた表現などをその知識を用いて理解することである。具体的な指導に関しては、フォニックス指導をさらに充実させ、長い単語でも音の足し算を自分でできるように指導する。また、不規則な発音についても体系的な知識を学習することで、読むことや書くことへの「足場づくり」になると考えている。フォニックス指導を充実させることにより、読むことはもちろんのこと書くことに関する意欲にも関係するのではないかと考える。また単語を書く際には、音読筆写の手法を取り入れることにより、生徒が認識している音と文字とをスムーズに一致させることができるようにする。そして文法に関しては、状況に応じてどのような英語表現を使えばいいのかを考えさせる活動を取り入れる。言語の使用場面や機能をインプットから生徒が見つけ出し、自分の言葉で説明できるようになるための指導が、Ⅲ期での文法学習に関する「足場づくり」になると考えている。これらの活動を繰り返し行うことにより、小学校段階において体系的に理解できなかった英語表現の文法に関する知識が整理され、英語をわかって使えるようになる基盤となるのではないかと考える。

**Ⅲ期（中学校2年生～中学校3年生）** <ことばの体系的知識を理解し状況の中で使う時期>

Ⅲ期では、生徒自身が獲得している英語に関する知識を文脈の中で適切に活用することをめざしている。英語科における「生活知」とは、日常的に話したり書いたりして使用している英語表現の知識であり、「科学知」とは学校で学習する言語の機能に関する知識のことと捉える。体系的知識を獲得させる指導（発音や文法など）を行うことにより、数多くある英語表現の中から、どの場面でどの表現を使うことが適切なのかを考えさせることができる。Ⅲ期では、実際の場面とそこで使われる英語表現との関連を特に意識して、生徒に表現と場面・状況の関連性に気づかせ、その考えを基に適切に英語表現を活用する（話す・書く）ことができるような指導を行う。英語表現を文脈の中で分析的に見ることを通して、状況や場面に応じた適切な表現を学習し、そして練習することが日常使用している英語知識（生活知）と英語の機能に関する知識（科学知）の「のぼりおり」につながるのではないかと考えている。



※Ⅱ期後期では、「状況に応じた表現の選択」や「状況を捉えた文章の適切な理解」を促す活動を全く行わないということではなく、教師からの発問、説明や助言の量がⅢ期と比べて多いことを示す。

### 【本年度の研究計画】

#### Ⅱ期前期

アルファベット3文字のフォニックス指導や歌の歌詞内容を辞書を用いて読み直す活動を入れることで、体系的な知識を学習し、それを基にして児童の「ことばの気づき」を促し、「体験と理解をつなぐ」学習活動を展開することができ、児童がより主体的に英語に親しむことができるか検証する。

＜具体的な学習活動例＞

- フォニックス（例外のないアルファベット3文字程度の組み合わせ）・・・音と文字の一致のため
- Bingo・・・アルファベットを書く練習のため
- ALTとの会話練習・・・英語表現に慣れ親しむため

#### Ⅱ期後期

例外も含めたフォニックス指導や言語事項の機能に関する知識を学習することで、ことばに関する体系的な知識を得ることができ、その知識を理解するために自分の言葉で説明する活動を取り入れることで、自分で英語表現を取捨選択して使用することをめざすⅢ期での学習の「足場づくり」になることができるか検証する。

＜具体的な学習活動例＞

- フォニックス（例外を含めた単語の音）・・・多くの単語を読めるようにするため
- ALTとの会話練習・・・英語表現に慣れ親しむため
- 言語事項の機能理解・・・状況に合った適切な英語表現を理解するため

#### Ⅲ期

言語事項の機能に関する学習をⅡ期での足場を基に、フォーカス・オン・フォームの手法を用いての指導を行い、それを続けることによって自分で状況に合った英語表現を取捨選択して適切に用いることができるか検証する。

＜具体的な学習活動例＞

- ALTとの会話練習・・・英語表現に慣れ親しむため
- 言語事項の機能理解・・・状況に合った適切な英語表現を理解するため
- 自己表現活動・・・状況や相手に応じた英語表現を取捨選択するのを促すため